



お大師像遠望

石手寺に参拝に行くと、山の上にあるお大師像が以前から気になっていた。遠目でこの大ききで見えるということはかなり大きい。暑い盛りではあったが、久しぶりにお山に登ってみることにした。昔の記憶を頼りに行くと、どうやら2、3ルートのコースがあるようだ。1番近そうな道を選んだため急坂をあえいだ。約20分ほどで130メートル近い標高の丘に上がることが出来た。途中からの光景は、石手川の緑の帯や、向こうには伊予灘の海がキラめいている。残念ながら、頂上からの眺めは樹木で遮られていて、

肝心のお大師像も、写真の如く全体を収めるのにやっとだ。
後でお寺さんに訊ねると、昭和59年に千百五十年祭（御遠忌・没後）があり、その節目に建てられ、お顔は中国の西安に向けているのだとか。丁度、足元に、この像のスケールについて書かれた看板があり、興味深い。フムフム、「高さ16メートル、本体重量50トン、基礎重量は110トン」と言われても、重さがピンときていない。鉄筋コンクリート造のこれだけの巨体を支えるのに、二倍以上の基礎が頑張っている事に驚かされる。お大師さんだけに、「物事は表面だけ見てもダメだよ」と教えられている気がしないでもない。周辺を歩いていると、「眼あき」なる時は途にふれてみな宝なり。心暗きときは即ち（すなわ）こごとく禍なり。」などと大師の言葉が書かれた意味深な看板もあったりする。ウオッチングを深めよ。」



大師像を見上げる



お大師さんの手

さて、お大師像は八幡浜市の四国山にも建っている。どこからでも眺められる石手寺の像と違って、こちらは山に上がつてからでないといふ。いから、知られた存在とは言えない。というより、八幡浜市に「お四国山」と呼ばれ親しまれるミニ八十八か所がある事自体が、市外の方にはポピュラーでないかと思われる。この町から一番近い札所は西予市宇和町にある四十三番明石寺だし、番外札所が山上市境にある出石寺や大洲の十夜ヶ橋だったりするから、どちらかと言うと四国遍路の本ルートからはずれている。が、

“MY TOWN” うおっちゃん

歩キ目デス & 足ラテス

Vol.53

仏像に見る、
大なるものへの憧憬

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー



伊予灘方向を眺める

ということか、我田引水発想で勝手に解釈する。

他にも、「顔の長さ2.4メートル、手の長さ1.7メートル、筆の長さ3メートル」とあったりして、書かれたのはこの像の設計施工をされた宮内設計事務所。20日前後の施工で完成したらしいが、足場櫓を組み、山上への資材運搬やら、きつと現場は想像以上の苦労があったに違いない。完成して26年になる。

さて、お大師像は八幡浜市の四国山にも建っている。どこからでも眺められる石手寺の像と違って、こちらは山に上がつてからでないといふ。いから、知られた存在とは言えない。というより、八幡浜市に「お四国山」と呼ばれ親しまれるミニ八十八か所がある事自体が、市外の方にはポピュラーでないかと思われる。この町から一番近い札所は西予市宇和町にある四十三番明石寺だし、番外札所が山上市境にある出石寺や大洲の十夜ヶ橋だったりするから、どちらかと言うと四国遍路の本ルートからはずれている。が、

しかし、実は視点を変えて、四国遍路を目指す九州の人々からすると、古来ここ八幡浜港はお四国の入り口なのだ。

その四国山、市街地の南に迫り、東麓の愛染堂からUの字型に西北の萬松寺まで、ミニ四国のルートが設定されている。江戸期嘉永二（1849）年に吉岡屋大八という人物によって発願され、紆余

曲折の後元治二（1865）年に満願成就した地四国である。標高130メートル弱の頂上には、大正初年開基、昭和24年再築の建徳寺があり、その境内広場に建つのがこの高さ10メートルの弘法大師修業像である。地元企業酒六紡績を始め、多くの浄財が集められ、彫刻家塩崎宇宙の作により昭和37年に建立された。今も、奇特なご奉仕の方がおられ、参道の山道はいつも掃き清められている。

先に立像を二体ご紹介したが、今度は横になっている像を訪れよう。内子町にある高昌寺の“ねはん像”。こちらは、毎年3月15日にご開帳となる地獄極楽図で賑わう“ねはん祭り”に因み、平成9年に建立された。8年にわたって2億円を募り、この寺の末寺数でもある24ブロックの石材、約200トンによって組まれているとのこ



弘法大師修業像



この日もお掃除の方が...

と。パンフレットには、高さ3メートル、長さ10メートルとある。このねはん像は、仏教を創始した釈迦如来であるが、丁度撮影時に西日が差しこみ、あたかも阿弥陀世界で言われる西方浄土からの光が届いているかのようであった。足の裏は、健康のツボではなく、仏足石としての紋様である。これ蛇足。

以上、県内でのラージサイズの仏像を三休観て来たが、人は何故大きいモノに憧れるのだろうか。奈良の大仏を初めとして、その影響範囲は達々とも、ある種の人心を集める必要がある場合に求められる“大きさ”というスケールへの傾倒。県外には100メートルを優に超える仏像も存在することを考えると、愛媛のそれは県民性ゆえか比較的大人しいサイズかも知れないが、それぞれに地方色なりの庶民の素朴な願いも見えてとれて微笑ましい。

また、社会情勢の変化も微妙に影響する。

八幡浜の大師像が立った昭和37年は、池田内閣による所得倍増計画真っ最中だし、初めて都市にスモッグが発生し始めるが、地元新町商店街は賑わっていた。松山の大師像が立った昭和59年は中曽根政権下で、日本が世界一の長寿国となったと厚生省の発表があり、1万円札など新札が発行され、ロサンゼルスオリンピックでは柔道の山下



後光の射す“ねはん像”



釈迦のおみ足

が金メダルに輝いた。最も新しく平成9年に登場した内子のねはん像の時代は橋本政権下、失楽園がベストセラーになり、消費税5%が実施されたが、今思えばまだ地方にも経済的余裕があった。ただ今も人々は、私を含めどこかでこの世にないと思われる大きさや高さへの憧れを失っていないようだ。現に、目下建設中の東京スカイツリーの伸びゆく姿に、何か向くのはきつとそのせいに違いない。

※注、塩崎宇宙（1911～1990）は八幡浜で活躍した彫刻家。大洲“中江藤樹像”など。

※注、涅槃（ねはん）とは釈迦の入滅のこと。亡くなった時のお姿がねはん像。